水の輪廻

ななしむし

水の輪廻

1

澄み切った春の空にある雲の親子が一緒に暮らしていました。
甘えん坊のフーワは甘えた声でお母さんにこう言いました。
「ねえ、ママ、僕こうしてママと一緒にふわふわ浮かんでられるのが本当に嬉しいんだ。
これからもずっと一緒に浮かんでられるんだよね？」
お母さんは少し寂しそうな顔をしてフーワの質問に答えました。
「そうね、これからもずっと一緒よ」
フーワはお母さんと一緒にいられることを何よりも幸せだと感じていました。
そしてフーワはこう思いました。
「ああ、なんて素晴らしい世界なんだろう。眼に映る物全てが輝いている。太陽や他の雲達、それに鳥たちや飛行機といった物まで何もかもみんな美しい光を放っている。何でこんなに素晴らしいのだろう」

2

お天道様の本日のお仕事が終わり、夕焼け色したお空に別れの挨拶を告げたと同時にお月様のお仕事がいつものように始まりました。
フーワはいつもこの時間になると一日飛び回った疲れで眠たくなります。
今日もいつも通り
「ママ、僕もう疲れちゃったから今日はもう寝るね、おやすみなさい」
と言いました。
するとお母さんはフーワに寄り添いフーワの頭を優しく撫でながら雲の一族から代々伝わる子守唄を歌い始めました。

「われら命の旅人よ
われらはどこからきてどこへむかう？
お天道さまもお月様も知らないものだから
風さんにでも尋ねてみませうか？」

何だか変わった歌ですがフーワはこの歌を聞くといつもすぐに眠りにつくのでした。
お母さんは何だか浮かない顔をしてフーワの寝顔を見ながら何か考え事をしていました。

その日の夜中にフーワは何かの物音によって眼を覚ましました。
「ぴゅーん、ぴゅーん、ひゅーん、ひゅーん」
まるで物が高い所から低い所へ落ちていくような音でしたが辺りがまだ真っ暗なので何の音か判断することができませんでした。
そこでフーワはよく眼を凝らして見てみるとなんと周りに浮かんでいた雲たちがへんてこなな丸い粒に姿を変えて地上を目指して落ちていくではありませんか。
「何がおこってるんだろう？」
フーワは何がおこってのるか全く理解できずにぽかんと口をあけたまましばらくぼんやりあたりを眺めていましたが、大事な事を忘れていた事に気が付きました。
「そうだ、ママがいない。ママはどこに行ったんだろう？」
そう考えだしたら居ても立ってもいられず、そのあたりを行ったり来たり飛び回ってはキョロキョロと我を忘れてお母さんを探し始めました。
するとその甲斐もあって少し遠くの方でお母さんらしき雲を見つけることができたのでフーワはそれこそまさに矢のような速さでそこへ飛んでいきました。
するとそこには体の色が黒くなったお母さんが他の雲たちと仲良く佇んでいました。
「ママ、ひどいや。僕に何も言わないで僕のそばから離れるなんて。
僕は独りぼっちになって心配でどうしたらいいかわからないぐらい寂しかったんだよ」
と少し怒り気味に言った後、続け様にこう言いました。
「でももう安心だね。これからまたずっと一緒だもんね」
といつも通り甘えた声で言いました。
それを聞いたお母さんは今までフーワに見せたことのない優しい表情でそっと言いました。
「フーワ、いい？今から私があなたに話すことをよくお聞きなさい」
フーワは少し変な気がしましたが
「うん」
と返事をしました。
「お母さんはこれから水と呼ばれる物体に姿を変え、他の雲たちと一緒に地上へ旅に行かなければなりません。悲しいことですが、あなたと離れ離れに暮らさなくてはなりません。私達が暮らしているこの世界では誰もが誰かとどんなに一緒にいたいと願っても叶わないことがあるのです」
フーワは驚きと悲しみのあまりに気が動転してしまい、言いたいことがあるのに口が全く動かなくなってしまいました。
お母さんはたくさんの涙をぽろぽろこぼしながらこう続けました。
「私がいま流してる涙は悲しいから流れているのではないの。この世界であなたに会えた

ことが本当に嬉しくて流れている感謝の涙なの。私はこの嬉し涙になってこれから
この世界を旅するのです。そしてまたいつの日にかお空に戻ってくるのです」
お母さんの体はみるみるうちに小さくなっていって、その場からほとんど消えてしま
いそうになっていました。
「ママ、待って。僕も一緒に連れて行ってよ」
と言いながらフーワは急いでお母さんに抱きつこうとしましたが、お母さんの体はあ
っという間に小さくなってしまい、どのようにしても抱きつくことができませんでし
た。
「フーワ、どうやらお別れの時間が来たみたい。でも悲しまないで。私たち親子はまた
すぐ一緒になれるから。今度私たちは川、海、空のどこで逢えるかはわかりませんが
それまでずっとあなたのことを想い、そして見守り続けていますよ。だからあなたも
お母さんのことをいつも想っていてくれたら嬉しいわ。フーワ、今まで本当にありが
とう。あなたと一緒に過ごせた時間はお母さんにとって何よりの宝物です。では又会
うその日まで身体に気をつけるのよ。さようなら」
と言い終えるとどこを探してもお母さんの姿を見つけることはできませんでした。

4

その日の晩、空全体、いいえ、宇宙全体にフワーの泣き声が響き渡りました。
しかしその声は悲しみではなくフーワがお母さんに今まで優しくしてもらったことに
対する感謝の気持ちでできた音でした。
お月様はフーワのその時の泣き声はこの世の物とは思えないほどの優しさと感謝に満
ち溢れた協奏曲のようだったと私に語ってくれました。
フーワはしばらくして泣くことを止め、こう誓いました。
「今度お母さんと会うその日まで僕は独りでいてもできるだけ寂しがらず、強く、そし
てみんなに優しくして生きることにしよう」
今日の仕事を終え、大きなあくびをしていたお月様がお空に別れを告げるとお天道様
がまたいつものように朝のお仕事の準備を始めています。
今日も新しい一日が始まろうとしています。